

天声人語

戦後もない1948年春、時の芦田均内閣の瓦解につながった「昭電疑惑」が起きる。東大工学部を卒業し、昭和電工に入つた新人、中島哲さんは迷いつつも社にとどまつた。のちの絵本作家かこさとしさんである▼「社長が逮捕されましてね、給料の代わりに佃煮が支給されました」。大混乱の職場に残つたのは、学生時代に志した化学研究に没頭できたからだ。36歳の年、博士号をとる▼その年に著した『かわ』には科学者らしい探究心が満ちている。始まりは雪解け。谷を下り、電気を生み、人々の暮らしを支えながら大海原へ注ぐ。鳥の目と虫の目を駆使し、川の全容を描き切つた▼細部を正確に描く情熱に、ほんわりとした独自の笑いが同居した。無心に遊ぶだらまちゃん。パン屋の切り盛りの作品を送り出した▼「書きたいテーマがまだ300もあります」。卒寿を過ぎたころ、神奈川県藤沢市の自宅でうかがつた。衰えた視力を補うため、机代わりの透明な板に下から螢光灯をあて、かじりつくように描いた。今年初めには、沖縄や福島、東北の津波被災地に捧げる絵本を1冊ずつ出している▼戦争の本質を描く試みは未完に終わった。何度も企画を立てては自らボツにした。4年前の自伝にこうある。「敗戦後七十年近く経つたのに、的確な『戦争』の絵本、非戦の絵本を描く見取り図ができるないのが恥ずかしいかぎり」。享年92。大往生とはいえる、その1冊を読みたかった。

2018・5・8